

---

# 鬼花伝

音踏よしの

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鬼花伝

### 【Nコード】

N1538Z

### 【作者名】

音踏よしの

### 【あらすじ】

ヤシロ チトセ  
八代千登瀬は15歳の誕生日の日、両親を事故で失う。彼女の  
マヤマ シケレ  
遠縁だという真山時雨の家に養子として引き取られた。 事故のシ  
ヨックから立ち直れない彼女を、時雨は不器用ながら励まし、ふた  
りの距離は縮まっていった。

家族同様に暮らし始めた頃、家にひとりの少年が訪ねてくる。彼の  
名前はタスク。

彼と一度も会った事のない千登瀬だが、何故か「懐かしい」と感

じてしまう。

そして、今まで平和だった千登瀬の身の回りで、怪しい影が蠢き始める。

## 花卉の章

助けて……私たちを助けて……。

また声がする。これで何度めだろう。

いつからか、自分の耳に聞こえるようになった幻聴に顔をしかめる。

今にも息絶えそうな、か細い女性の声。けれども、必死さだけは伝わってきて、何もしてやれない自分が酷く無力に思えてきた。

「千登瀬、どこか具合でも悪い？」

「んー悪くはないけれど……ちょっとね」

「どうした？無理しなくてもいいんだぞ」

心配症な両親に、幻聴が聞こえると知られたら、いらぬ心配をかけてしまうかもしれない。それに、空耳という事もある。

車に揺られてもう時間は経つ。そろそろ、母親の実家がある田舎に着くだろう。

「うっん。おばあちゃんの家で少し休めばいいよ」

「ならいいけれど……」

まだ不安がる両親に、大丈夫だと笑ってみせる。座席により深く腰かけて、ウトウトとしだすと、先ほどの幻聴がより鮮明に聞こえてきた。

お願い……私たちを……どうか、助けて……。  
ねえ……お願い……ねえっ！

一際大きく聞こえた声と、その瞬間にグラツとした揺れと鈍い痛みが体を襲った。

耳元で大きく何かが割る音。横目で見ると、車のフロントガラスが割れていた。むせるような圧迫感で、一瞬だけ呼吸ができなくなる。

視界は傾いていて、自分自身が倒れているのだと気づいた。

「……あれ」

目の前にブランと映る腕。ガラスで切れたのか、その腕は傷だらけで、血が出ていた。

「おかあさん……？」

その手首にされてある薄桃色のブレスレットは、母親がつけていたものだった。

ハンドルに顔をうつ伏せてピクリとも動かないのは、父親だろうか。

「おとう……さ……」

カチカチと唇が震える。遠くで大丈夫かと呼びかける声が聞こえる。声を出して助けを呼ぼうとしても、恐怖で何も出なかった。

目の端から涙が溢れ、それを拭う手は痛みで動かせない。

事故だ、と。

少し遅れて気がついた。



## 人物紹介（前書き）

簡単な人物紹介を。  
増えると思います。

## 人物紹介

ヤシロ チトセ  
八代千登瀬

15歳 女

まっすぐに長い黒髪に、白い肌を持つ。

中性的で整った顔立ち。

両親を事故で亡くしており、そのショックから立ち直れていない。  
争い事を好まない優しい性格。

マシマ シグレ  
真島時雨

20代半ば 男

明るめの茶髪に、両耳にピアスをしている。

外見とは裏腹に、茶華道界に名が精通している。

基本浴衣。不器用だが根は優しい。

タスク

18歳 男

男子にしては長めの黒髪に、切れ長の目を持つ。

あまり騒がず常に冷静だが、かなりの毒舌家。表情は一定。

冷たく見られがちだが、実際心の中では色々と感情を表している。



シラスイ  
ワコ  
白縫和子

20代後半 女

グラマラスな女性で、時雨の古い友人。

千登瀬の姉的存在。妖艶な雰囲気とは別に、かなり大雑把な性格。

「来るもの拒まず」をモットーとしている。

## 011 翡翠の幻聴

交通手段もさほど無い、田んぼばかりが広がる田舎町　「楠樹町」  
クスキチヨウ

都心からかなり離れており、そこまで行くのにはバスで数時間ほどかかる。人口も少ないが、山に囲まれているそこは、季節の変わり目の景色が良く、観光スポットとしても人気だった。

楠樹町から離れた山の中のバス停に、一人の男がいた。

180は越えているであろう長身で、明るめの茶髪。耳には派手なピアスをしており、とても田舎の人間とは思えない。

しかし、その外見に似合わず、藍色の綺麗な浴衣を身に付けていた。

煙草を吸いながら、男はベンチに座り、携帯の液晶画面を睨みつける。

「……あっちいな」

そして五月蠅い。

山に囲まれているこの町では、ひっきりなしにセミが鳴いている。うつすらと額に汗を滲ませながらも、その男　真山時雨はある人物を待っていた。

「お、アレじゃねえのか」

そしてその視界にオンボロのバスが映る。

数時間に一本しか無いバスには、ひとりの少女が乗客として乗っているだけだった。バスの運転手は時雨を見つけると、軽く微笑んだ。

バス停にバスが止まり、ドアが空気の抜けるような音をたてて開く。

運転手に料金を手渡し、リズムよく段差を降り、少女の姿がハッキリと時雨の目に映った。

透き通るような白い肌に、腰までまっすぐ伸びた黒髪。

顔立ちは中性的で整っており、可愛いというよりは綺麗といった印象を受ける。

白の半袖のセーラーを着ており、今時の子にしては珍しく、スカートも膝上だった。

「久しぶりだな、千登瀬」

名前を呼ばれて、千登瀬はそっと目を伏せた。恥ずかしいのか、緊張しているのか分からないが、その頬は少しだけ赤く染まっている。

「時雨さん、緊張してるんですよ。優しくしてあげてくださいよ」

「わーってる。アンタもご苦労だった。わざわざ悪いな」

「いいえ。私はこれで仕事が終わりなんで。なんなら、町まで乗せて行きましょうか」

「いや、いい。ちょっとコイツと歩きながら行く」

運転手は笑顔を崩さずに頷き、ドアを閉めた。

バスが遠ざかっているのを見送り、「さて、と」時雨は立ち尽くす。

している千登瀬を見下ろした。

「ほんじゃ、行くか」

「えっと……お、お世話になります……」

遠縁の親戚が事故に合い、その子どもがひとりだけ助かったと連絡を受けたのは、1ヶ月ほど前だった。

夏休みの初めに母親の実家に帰ろうとしていた時、大型トラックが誤って突っ込んだのだという。

車は大破し、助手席と運転席に乗っていた夫婦は即死だったらしい。後席に乗っていた千登瀬だけが軽傷で済んだのだ。

千登瀬の両親とはそれなりに親睦のあった時雨が急いで病院へ向かい、対面した千登瀬は見るに耐えない状態だった。

事故のショックからろくに食事も取れず、両親のことを思い出しでは静かに涙を流す。

その繰り返しであった千登瀬を、時雨は迷うことなく引き取る事に決めた。年頃の娘が男とふたりきりで住むという事に、周りの親戚からは批判をされたが、逆に千登瀬の面倒を見てくれそうな親戚もいない。

祖父母に頼もうとしたのだが、父親の方は既に他界しており、母親の方は病気を患っていたため、千登瀬をあずける事ができなかったのだ。

「てなわけで。お前は退院したら、俺の家に来い。田舎だから何も

無えけどな」

そう病室で言ったのが、ちょうど1ヶ月ほど前。

精神的なショックが大きいため、学校もしばらく休む事にした。田舎での暮らしが、少しでも千登瀬にとって心のケアになるのなら、時雨は考えていた。

「ここが今日からお前の家。わかったか？」

バス停から歩いて数分。時雨のとおり、田んぼと少しの家しかないそこは、山に囲まれており、とても美しい風景だった。

時雨に案内されたのは、和装の一軒家で、かなり大きい。今までひとりで住んでいたということが信じられないほどの広さだった。庭も丁寧に手入れが行き届いており、時雨の趣味なのか、盆栽が並べてある。

松の木はとても立派で、そこが木陰となっていた。庭には小さな池もあり、鯉が数匹泳いでいる。

「……綺麗」

「知り合いから貰った。飼うのは大変だけど、愛着湧いちゃってな」

「私もお世話してもいい？」

「おう。後でフの場所教えてやつから」

玄関から入ると、木の匂いがする。

ヒタヒタと冷たい床を歩いて、時雨は襖を開けた。

そこには、8畳ほどの部屋があった。花柄の布団と、勉強机、本

棚が置いてある。

「お前の部屋な。押入れもあるから。昨日届いた荷物が、そのダンボールな」

「ありがとうございます」

自分のためにここまでさせてしまっているのだろうか。  
千登瀬は内心不安に思いながら、深々とお辞儀する。  
すると、くいつと大きな手で頭を上に向かせられた。

「仰々しくすんな。お前は今日からここに住むんだつつの。俺にも敬語使うな。あと、ここに住むからにはメシとか作ってもらうかな。今日は俺が作るけど」

「え、えと……は、はい」

「だから、敬語やめろって。俺はお前の家族だ。お前は自分のとーちゃんかーちゃんに敬語使うか？」

そこまで言って、ハッと我に帰る。

千登瀬にとって、両親のことはタブーだ。迂闊だったと自分の発言を悔いていると、

「ふふ……。使わないね」

微かに笑って、千登瀬が答えた。

久しぶりに見た千登瀬の笑顔。

時雨もニヤリと笑い、くしゃくしゃとその頭を撫でる。

「それでいいんだよ、バーカ」

少々子どもっぽいだろうか。

けれど、今の千登瀬にとってはこの方がいいのかも知れない。

ボサボサになった頭で、千登瀬がまた笑う。今度は、きつと時雨に笑いかけたのだ。

そう思うと、心の中が暖かくなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1538z/>

---

鬼花伝

2011年12月5日20時04分発行